

陣痛促進剤について

診療を終えて帰宅途中の車の中で、ラジオから流れてくる話に耳を傾けると、女性アナウンサーと弁護士が医療事故をめぐる対談していた。

「最近、お産の時に使われる子宮収縮剤、陣痛促進剤によるトラブルが多く、陣痛促進剤の乱用によって子宮破裂、小児の脳性麻痺等の医療訴訟が増えている」という内容であった。＜陣痛促進剤の乱用＞という言葉に一瞬不快な気分になったが、ある妊婦さんの母子手帳のことが脳裏をかすめた。

一通りの診察を終え、記録のために母子手帳を開くと、妊婦さん自身が記入する欄にぎっしりと文字が記入されていた。記入する人が少ないこともあって、できるだけ気付いた事を書いておくようにと再三説明・指導している欄であったので、注意深く読み始めた。

第一子の分娩の時は、自然陣痛が起こり深夜に入院したが、すぐにお産にならなかった。朝の診察時、医師と助産婦が「陣痛が少し弱いようでー」と話しているのが聞こえたが、特別説明が無かったので自分のことかどうかわからなかった。しばらくしてから点滴が行われて“あっ”という間に陣痛促進剤によって出産してしまった。とその時の様子が詳細に書かれていた。そして最後に「今度のお産は自分の力で産みたい」と。

陣痛促進剤使用のための十分な説明が無かったことへの不満、何がなんだか分からないまま出産したことに対する母親としての不満を読み取ることができた。

陣痛促進剤も使い方によっては、子宮破裂の原因になったり、過強陣痛による胎児の低酸素状態を招き、脳性麻痺等の原因になることもあり、陣痛促進剤の使用にあたっては、分娩の進行状況、陣痛の状態等を十分考慮して慎重に使われている。

「安全なお産を求めて——陣痛促進剤による能書を考える会」が結成され、活動を起こしている所もあると聞いている。

患者さんのことを考えて行われる医療行為も、臨床の間では完璧ということがない以上、不測の出来事が何%かの確率で起こることは避けられない。私達にとっては予測不可能な出来事であっても、患者さんにとっては耐えられないことであり、それを何とか0%に近づけるようにと努力と工夫がされていると思っている。

医師の立場から十分な説明と了解を得たと思っていることも、患者さんからは必ずしも理解されていないということが実際には多いのではないかと、改めて臨床の厳しさを知らされたひとときであった。